

第2分科会

(美里町)

過疎地域持続的発展優良事例発表会

コーディネーター

法政大学現代福祉学部教授

関司 直也

過疎地域持続的発展優良事例発表団体

五条ヶ丘活性化推進協議会 (山梨県身延町)

地域住民とともに作る「身延愛」の推進

特定非営利活動法人阿波勝浦井戸端塾 (徳島県勝浦町)

古代から未来へ、夢・想い・歴史文化をつなぐプロジェクト～恐竜化石とビッグひな祭りを活用した町づくり～

特定非営利活動法人あったかいよう (徳島県海陽町)

とくしま南を、海が見える「あったかい」まちに

くにさき地域応援協議会寄ろう会 (大分県国東市)

地域づくり支え合い活動共通WEBサイト“国東つながる暮らし”(海・山・川・歴史・そして繋がる人々の暮らし)

美里フットパス協会 (熊本県美里町)

地域を元気にする魔法 フットパス ～交流人口を増やすから Walkers are Welcome へ～





歓迎挨拶

美里町町長

上田 泰弘氏 (うへだ やすひろ)

皆さん、おはようございます。美里町長の上田でございます。「全国過疎問題シンポジウム2022 in くまもと」分科会の開催に当たりまして、開催地の町を代表し、歓迎の御挨拶を申し上げます。

本日は全国各地から多くの皆様方に美里町へお越しいただき、心から歓迎を申し上げます。また、関係者の皆様におかれましては、平素から過疎地域の振興に対し、格別の御尽力と御高配を賜っておりますことに深く感謝申し上げます。

そしてこの度、昨日のシンポジウムにおきまして、優良事例表彰を受賞されました団体の皆様、本当におめでとうでございます。心からお喜びを申し上げます。

今回のシンポジウムは本日2日目を迎えました。全国各地の過疎地域が抱える人口減少や、少子高齢化などの様々な問題は、ここ美里町でも深刻な状況でございます。しかし、昨今の新型コロナウイルス感染症拡大に伴うテレワークの普及等の影響によりまして、地方への移住が活発になるなど、関心が高まっていると感じております。このような流れを好機と捉え、過疎地域だからこそ感じる事ができる喜びや、魅力に対して、やはり私たち過疎地域に住む人間もそれに気付く必要があるのではないかと思います。また、その良さというものを再発見するという事も私たち過疎地域に住む人間には必要ではないかと感じております。

本日は、美里町も含め5つの団体に事例発表をいただきます。その中で、1つでも課題解決につながるヒントを得ることができれば幸いです。美里町ではフットパスの取組みを

御紹介いたします。里山の自然を感じ、その美しさに癒されながら、地元の人と交流できることなどが特徴です。本日は素晴らしい天気となっておりますので、フットパスの現地視察もきっと楽しんでいただけたと思います。

最後に1つイベントを御紹介させていただきます。美里町には3,333段の日本一の石段があります。NHKの『ドキュメント72』で取り上げられて、さらにまた登る方が増えたと聞いていますが相当きついです。先日は『珍百景』に出ましたが、ダンベルを持って3,333段を1日何往復もされるというような方もいらっしゃいまして、まさに修行のような行いであります。その3,333段が33周年を迎えました。本当は昨年だったのですが、コロナで記念イベントができないままとなっていました。今年は3,333段を登るアタック・ザ・日本一というイベントを11月19日土曜日に開催をさせていただきます。入口のブースにチラシがございますので、後で御覧いただければと思います。また修行したいという方がいらっしゃれば次の日は歩けなくなるとは思いますが、体力は数段向上すると思います。強い心の持ち主がいらっしゃいましたら、ぜひ挑戦してみてくださいと思います。それでは、限られた時間ではありますが、ぜひ美里町の景観、歴史、文化を楽しんでいただければと思います。

終わりに、本シンポジウムに御参加いただきました皆様の今後の益々の御活躍、御発展を祈念いたしまして、歓迎の挨拶とさせていただきます。どうぞ今日1日、よろしく願い申し上げます。

過疎地域持続的発展優良事例発表団体



五条ヶ丘活性化推進協議会 (山梨県身延町)

連盟会長賞

地域住民とともに作る「身延愛」の推進

五条ヶ丘活性化推進協議会は人口減少や少子高齢化により、町内にある複数の小中学校が統合により廃校となったこと、また、地域にあった多くの商店等が閉店して地域の活力が大きく低下していることなどを踏まえ、地域の観光資源や施設等を活用した取組を行い、地域活性化を図ることを目的に設立された団体である。廃校舎を活用した校庭キャンプの実施や地域の情報を載せた手作り地図の配布など、地元の資源や施設を活用した取組を行っており、活動により全国からの訪問者が訪れるなかで地域の住民におもてなしの心を訴え、それが評価されていくことで地域住民に自信と誇りが醸成されている。行政が運営を主導するのではなく、運営の全てを協議会が担っており、地域活動を通じて地域リーダーの育成や発掘を行い、持続可能なまちづくりに寄与し、まちを担う人材の確保、人の流れの創出による経済の活性化等、地域活性化につながる先進的な取組を行っている。



特定非営利活動法人阿波勝浦井戸端塾 (徳島県勝浦町)

総務大臣賞

古代から未来へ、夢・想い・歴史文化をつなぐプロジェクト ～恐竜化石とビッグひな祭りを活用した町づくり～

人形文化の伝承と町おこしを目的に、30年以上にわたり毎年「ビッグひな祭り」を開催している。全国から家庭で不要になったひな人形をこれまでに30万回回収し、供養して飾り、展示するこの活動は、近年取り上げられているサステナブルな取組の先駆けであり、3万人もの観光客が町を訪れ、開催期間中に当団体が発端となって、地元他団体などとイベントを実施するなど、町全体を巻き込んで地域活性化に大きく寄与している。また、平成6年に町内で発見された県内唯一の地域資源「恐竜」を用いて、恐竜情報や手作りの標本を飾る「恐竜の里」の整備や、古生物学者による専門知識を活かしたイベント活動を行うなどの町おこしも年々その規模が大きくなっており、勝浦＝恐竜のイメージへの取組が着実に進んでいる。30年以上にわたり町の地域資源を活かした魅力の創出に貢献をしているとともに、今後も取組が次世代へ繋がるように自主的・主体的な活動を行っている。



特定非営利活動法人あったかいよう (徳島県海陽町)

連盟会長賞

とくしま南を、海が見える「あったかい」まちに

平成27年度に実施した、地域住民と行政が連携して地域の課題解決について考える「海陽町みらい会議」を前身とし、平成28年度に住民たちが、自分たちのみらいをより良いものにするために自主的に立ち上げた団体である。①にぎわいづくり、②人材育成、③移住者支援が活動のメインの柱であり、①では各種イベントの開催の他に、自然インストラクターの育成やDMVのPR等に関わっており、②ではひとり親家庭向けに料理教室の開催や、外国人技能実習生などを対象とした日本語教室を開催し、地域住民の重要な交流の場となり、③ではお試し住宅の「いもちの家」を運営し、移住希望者に町での暮らしを体験してもらう取組を行っている。イベント開催からしごとづくり、町の賑わいを伝えるための人材育成、移住や多世代交流の支援まで、地域を元気にするための取組を行っている。



くにさき地域応援協議会寄ろう会 (大分県国東市)

総務大臣賞

地域づくり支え合い活動共通 WEB サイト“国東つながる暮らし” (海・山・川・歴史・そして繋がる人々の暮らし)

国東市では住民同士の支え合い活動(居場所づくりや生活支援)を基幹事業に、生活圏域毎で地域づくり支え合い活動を住民主体で進めており、平成30年3月より市内全域の情報共有を目的に本団体が設立された。地域住民が主体となり、スマホ教室など情報発信を楽しみながら学べる環境づくりを創出し、スマホ教室がきっかけとなり、これまで地域づくりに消極的な地域も積極的に参画するよう変化してきている。また、『誰ひとり取り残さない、人に優しいデジタル化』の実現に向けて、SNS インスタグラムを活用した地域づくり支え合い活動共通WEBサイト“国東つながる暮らし”を制作・公開している。現在は、地域づくり支え合い活動の可視化により、いつまでも誰もが安心して生活がおくれるよう、高齢・過疎化が進む中でスマホ取扱いデジタル対策に向けて買物支援や移動支援、通院支援、防災などの情報の一括管理がSNS等も含めて行えるシステムづくりについても検討をしており、多方面での効果が期待される取組を行っている。



美里フットパス協会 (熊本県美里町)

令和2年度過疎地域自立活性化優良事例表彰 連盟会長賞

地域を元気にする魔法 フットパス

～交流人口を増やすから Walkers are Welcome ～

町内17か所にフットパスコースを設け、定期的イベントの開催やコースの提供を行っている。滞在型観光による交流人口や関係人口の増加と共に、地元への経済効果も期待される。また、地元住民による郷土食の体験や縁側カフェにより住民と観光客との交流も生まれている。

【過疎地域持続的発展優良事例発表会】



コーディネーター

法政大学現代福祉学部 教授

図司 直也氏 (ずし なおや)

1975年愛媛県生まれ。東京大学農学部を卒業し、東京大学大学院農学生命科学研究科農業・資源経済学専攻に学ぶ。2005年に同研究科博士課程を単位取得退学。博士（農学）。財団法人日本農業研究所研究員、法政大学現代福祉学部専任講師、准教授を経て、2016年より現職。
中山間地域等直接支払制度に関する第三者委員会委員長、(財)地域活性化センター・地域リーダー養成塾主任講師等、地域振興・人材育成に関するアドバイザーを歴任。専門分野は、農山村政策論、地域資源管理論。
主な著書は、『就村からなりわい就農へ』（筑波書房）、『地域サポート人材による農山村再生』（筑波書房）、『新しい地域をつくる』（共著：岩波書店）、『プロセス重視の地方創生』（共著：筑波書房）、『内発的農村発展論』（共著：農林統計出版）、『人口減少社会の地域づくり読本』（共著：公職研）、『田園回帰の過去・現在・未来』（共著：農山漁村文化協会）など。

※敬称略

図司／皆さん、おはようございます。2日目になりました過疎問題シンポジウムですね。この美里町で第2分科会開催ということになりました。改めて、昨日、優良事例団体として表彰された4団体の皆さん、おめでとうございます。そして、美里の活動としてフットパス協会が令和2年度の表彰対象になっておりました。ただ、コロナ禍ということもありまして、大会そのものが開催できなかったということで、ここで今回ご発表いただきます。改めておめでとうございます。

それでは、進めて参りたいと思います。この第2分科会に関しては、住民の皆さんが中心となって取組まれたものが並んでおります。今日ご紹介いただく5つ、いずれもそういう形になっております。昨日のシンポジウム、パネルディスカッションの中でも、行政の皆さんと住民の皆さんの連携の仕方がどうあるべきかみたいなどころもいろいろ議論になりましたが、それを具体的な形で実践いただいているものばかりだと思いますので、ぜひ先ほど町長からのお話にもありましたけれども、いいところを盗んで帰っていただいて、足らないところはぜひ現場のほうに足を運んでいただくことで、より交流

を深める、そういう機会につないでいただければよろしいかなと思っております。よろしくお願いたします。

それでは、全国過疎地域連盟会長賞を受賞されました「五条ヶ丘活性化推進協議会」から「地域住民とともにつくる「身延愛」の推進」をテーマにお話をいただきます。よろしくお願いたします。

五条ヶ丘活性化推進協議会

(山梨県身延町)

地域住民とともにつくる「身延愛」の推進

依田／皆さん、おはようございます。山梨県から参りました、「五条ヶ丘活性化推進協議会」事務局長の依田と申します。よろしくお願いたします。

今回は貴重な機会をいただきまして、本当にありがとうございます。また、栄えある表彰をいただきまして、重ねて厚く感謝いたします。

私ども、活動を始めて5年目を迎えました。過疎の地域だからこそ、自分たちがなんとかしなければならぬという一心で活動をして参りました。

身延町には2つ有名なものがございます。1つが日蓮宗の総本山「身延山久遠寺」です。もう1つが「富士山」なんですけれども、千円札の裏面に本栖湖からの富士山が描かれておりますが、これが私ども身延町から撮影した風景となっております。身延町は、山梨県の南部にあるんですけれども、現在人口が1万人、この50年間で減少率が66%、人口が3分の1ということで、全国的に見ても過疎の進展が著しい地域となっております。

そうした身延町なんですけれども、『ゆるキャン△』が突然やってきたということで。皆さん『ゆるキャン△』ご存じでしょうか？『ゆるキャン△』というのはアニメ作品なんですけれども、平成30年1月からアニメのテレビ放送が始まりました。4年前ということになりますが、このアニメというのが高校生の日常を描いた漫画でして、あふろ先生という方の漫画作品となっております。漫画自体は少し前の平成27年に連載がスタートしたんですけれども、テレビ放送が平成30年1月から始まったと。この漫画の内容というのが、山梨県周辺を舞台にしておりまして、キャンプ場などでアウトドアの魅力ですとか、女子高校生の日常を描いた作品になっています。非常にゆったりとした空気感の漂う作品で、ちょうどコロナ禍に全国的にキャンプブームが広がった中で、今大ヒットしている漫画になっています。登場人物5人が通っている架空の高校、本栖高校というのがあるんですけれども、その舞台がなんと私どもの地元の下部小学校、中学校です。実は、少子高齢化の中で私どものこの小中学校というのが、平成29年、28年に閉校しております。学校というのは地域住民の心のよりどころ、地域文化の中心であったわけなんですけれども、それが閉校したということで地域住民に非常に喪失感が漂っておりました。そのような中で協議会が設立、私どもの活動が始まったのですが、その本栖湖の富士山の湖畔に、「浩庵キャンプ場」という日本でもかなり有名なキャンプ場があり、なぜかそこ

が非常に賑わってきたということで、そのオーナーからキャンプブームが始まってファンがキャンプをしに来たと。次にどうなるかということ、地元にも、さらにその学校のある過疎の私どものところに人が来るんじゃないかということを見越して、協議会を作ってしっかり受け入れ態勢を作るべきじゃないかというようなアドバイスをいただきました。

今日はメンバーとともに4人で参っておりますが、前会長が地域の若手20代から40代の若者に声をかけまして協議会が発足し、だいたい20人ぐらいのメンバーで活動しております。その中で私どもが常に考えておりますのは、当然『ゆるキャン△』をきっかけに地域活性化を図ろうというものですけれども、ただしアニメに依存するのではなくて、アニメが終了した後であっても持続可能な活動をできるようにしようということで、考えながら活動しております。

活動をし始めて5年間様々な関係機関、例えば行政であったり、地元の飲食店、地域住民、観光事業者など、様々なところと連携しながら、魅力的な地域づくりを通しまして多くの観光客の呼び込みを行っております。私どもの1つの特徴というのが、行政が運営に直接的に入っていないということかと思えます。行政が主導的に関わっているようなケースも全国的には当然あるかと思うんですけれども、私どもは地域の20代から40代の20名で全ての活動をやっているというのが特徴かなというふうに考えております。

例えば、行政が主体的に関わってやるのも当然いいかと思うんですけれども、行政職員の異動など、持続的な継続的な活動が困難となるようなケースも想定されますので、逆に言えば行政が主として運営に関わっていないということが私どもの強みかというふうに考えております。

まず活動の1つ目は、聖地巡礼に対する対応です。アニメがきっかけとなって地元に来るようになりました。そうすると、聖地巡礼に訪れる方の対応というのが必要になってきま

す。例えば、アニメに登場するおまんじゅう屋さんとか、お寺とか、公園とか、学校があるわけですけども、今までそういったものは全くスポットが当たっていない、そこが目的地として成立しない観光資源だったわけですけども、そこに私たちが積極的に情報提供する、目的地として捉えてもらうという活動を行うことでそこがゴールとして全国から多くの観光客が来てくれると。そういったことを目指した取り組みです。

地域とそのファンをつなげる1つ目の取り組みとして、最初は15カ所の看板を甲斐常葉駅から、架空の本栖高校ですけども、本栖高校にというような看板を設置いたしました。これがやはりファンの方に対しては、地域が受け入れているというような安心感を持っていただけるといふこともありますし、地域住民も初め『ゆるキャン△』というものを知らなかったの、地域住民に知ってもらうというような狙いで設置をいたしました。地域住民も「なんだこれは」と。「『ゆるキャン△』ってなんだ?」、「本栖高校って、できたの?」と。

もう1つ地域住民に積極的にその聖地巡礼でいらっしゃっている方に声かけをしてもらうようお願いしました。結構全国から来るようになると、町中を歩いているんですけども、スマホを片手に歩いているだけで地域住民との交流がないということなので。地域住民の80歳とか90歳の方たちから「『ゆるキャン△』で来たんですか?」とか、「どこから来ましたか?」と聞いてもらいます。最後に「これからどこへ行きますか?」というふうに聞いてもらっています。そうすると、地域住民のほう地域のことを詳しいので、「そこはこういうところですよ」といふような受け答えもできますし、80とか90のおじいちゃんおばあちゃんから話しかけると、聖地巡礼に来る方ってびっくりしますよね。そうしたことがまたTwitterとかで発信されて、地域として受け入れているという安心感をファンの方に持っていただくといふような

ことにつながりました。

次にファンの方は地域を知りたいといふふうになりました。田舎の過疎地域で何もない中でも例えば先ほどの設置した看板の場所を知りたいですとか、食事、どこでおいしいものが食べられるか。結構観光地に行く目的の1つが、おいしいものを食べたいといふのがあると思うんですけども、地元の方が勧める地域の食事処といふようなことの提案ですとか、お土産屋さんを教えてください、また他に楽しいところがあるかといふようなことを知りたいということになりました。そこでまた私たちの活動につながるんですけども、地域の案内地図の作成ということを行いました。今日、受付で皆さま方に地図のほうを配らせていただいたんですが、今回の地図が17版ということで、これまでに5万4,000枚を作成して配っております。見ていただくと分かりますように、地域のお勧めスポットをまとめてあります。このようにファンの方と地域をつなげる1つのツールとしてこうした案内図も作成しております。

また一方、ファンの方は本当にこういうものが貴重な観光資源、資材としてSNSとかいろんなものに発信してくれたり、非常に興味を持って見てくれておりますが、そうしたことを地域の方が知ること自分たちの地域に自信を持ったり、愛着が深まるという地元の方のそういう心境の変化にもつながっているかと考えます。初期の頃は手書きの地図なんですけれども、前会長が一生懸命地図を作成しまして、これはこれで非常に味があって私は好きなんですけれども。今はパソコンで作成しておりますが、こうした全ての活動が行政に依存するのではなく、私たち全て、会の支出の中で完結しておりますし、町のあらゆる観光スポットにこうしたものを設置して、地域の賑わい創出につながっているところです。

次の活動というのが、ファンの方と話す中で本栖高校でキャンプをしたいということになりました。これまでにだいたい30回ぐらいキャ

ンイベントを廃校となった校舎のグラウンドで実施して、だいたい5,000人の方に参加してもらっています。山梨大学の試算によりますと、1泊2日でこうしたキャンプを訪れる方というのが地元でだいたい2万円ぐらいのお金を落とすということが報告されており、私どもの活動によって、コロナ禍ということでキャンプイベント自体をしづらい時期もあったんですけども、少なくともだいたい1億円ぐらいの経済効果があったのかというふうに考えているところです。このような形で、アニメと組み合わせた形で誕生日会をやったり、グラウンドでキャンプファイヤーをやったと。新聞などにも『『ゆるキャン△』で町に人』ということで、マスコミにも好意的に多く取り上げられているところです。

その他、地域の清掃活動をしたり、その『ゆるキャン△』のドラマ撮影というのもあったりするんですけども、そうしたものに協力したり、地域の活力創出に向けまして活動をしているところです。

また、大規模イベントというものも定期的に行っておりまして、今画面に出ていますのは音楽祭ということで。これ実際のアニメの出演者にご協力いただいて、廃校となった学校のグラウンドで音楽祭というものを開きました。これも1,000人を超える参加者がありまして。この運営を全て素人というか、行政に頼らず、行政の協力は得ながらですけども、主体的に私どもがやるということで20代から40代のメンバーでやっているところです。

また、今年は本栖高校の文化祭ということで5月6月に4日間行いまして、2,500人の方に参加いただきました。東京とか都会であれば動員は簡単ですけども、私どもの身延町というのはおそらくこの美里町よりもさらに交通の便が悪いようなところでして、それでも4日間で2,500人。また、イベントに地域の飲食店とかそういったところを巻き込んで、しっかり地域にお金が落ちるといようなことも考えながら

実施しております。このような形で、新聞、テレビ、大きな反響がありました。

その他、地域貢献活動ということで様々な行政の中にも私どもが参画させてもらって活動しております。身延町の「みのワン」というマスコットキャラクターなんですけれども、例えばこういった選考委員にも関わったりとかですね。様々なイベントに協議会として参加して、町の観光課などとともに活動しているというような経緯もございます。

地域住民が知るということで、先ほど申し上げましたように地域の資源の再認識ということで、身延町の良さを知ると。地域住民も含めて良さを知る。身延町を愛するきっかけ作りにつながっているというふうに考えます。私どもの考える地域活性化ですけども、このような環境だからこそ我々が活動を行って、人と人、人と地域とのつながりが深まって生き生きと地域で生きていくことができると。私どもも行政とともに、また行政の両輪として活動しているところでもあります。今日ご覧いただいた資料の中で新聞やテレビに関する資料が多かったかと思うんですけども、マスコミの全面的な協力のもと、私どもの活動がかなり全県的にも広がりを見せておりまして、イベントをやる中で毎日SNSとかを使って情報発信したり、そうやってどんどん波及するような形を心がけて活動しております。

今日は、公務員の方が多くかと思いますが、私も実は公務員で、仕事とは全く別に活動しています。過疎地域はどうしても、疲弊する中で企業とかNPOっていうのはなかなか活動しづらい状況にあるかと思うんですけども、地域には非常に優秀な公務員の方が多くいらっしゃるって、最終的にはそうした方がいかに業務ではなくて地域に飛び出して一緒に地域を巻き込んで活動するかということが非常に重要かとも考えております。

以上で、発表のほうを終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

図司／依田さんどうもありがとうございました。昨日、小田切先生からも関係人口の話がありましたけれども、入口をアニメからきっかけをもらいながらもその次への橋渡しが大変だ、どうするかということが論点だというようなことありましたが、地域のために協議会を作りながら展開していくっていう、まさにその橋渡しの1つのアプローチをお話しいただけたかなと思います。依田さん、どうもありがとうございました。続きまして、総務大臣賞を受賞されました「特定非営利活動法人阿波勝浦井戸端塾」から「古代から未来へ、夢・想い・歴史文化をつなぐプロジェクト～恐竜化石とビッグひな祭りを活用した町づくり」ということでお話をいただきます。それではよろしくをお願いします。

特定非営利活動法人阿波勝浦井戸端塾

(徳島県勝浦町)

古代から未来へ、夢・想い・歴史文化をつなぐプロジェクト
～恐竜化石とビッグひな祭りを活用した町づくり～

稲井／皆さんこんにちは。徳島の勝浦町から参りました、勝浦井戸端塾の稲井と申します。事例の表彰と、このような立派な会場で事例発表をさせていただくこと、誠にありがとうございます。事例発表については隣にいる国清が説明しますので、皆様方のご指導お願いしたいと思っております。よろしくをお願いします。

国清／皆さんこんにちは。事務局長の国清です。先ほど紹介がありましたように古代から未来へということで、恐竜化石とビッグひな祭りで町おこしをしております。私たちのほうではひな祭りとは恐竜、ひな人形と恐竜ということで、美女と野獣というキャッチフレーズで全国発信をいたしております。

まず町の位置なんですけれども、徳島県の東部であります。県とかでいいますと南西部に位

置しております、徳島市からは20キロ、30分ぐらいのところにあります。人口もだんだん減りまして、ずっと保っていた5,000人台を切りました。約4,800人ということで、今現在町の状況でございます。

特産はなんといっても、貯蔵みかんであります。2月、3月の全国的にみかんが少ないときに貯蔵したみかんを出荷しております。それと、この井戸端塾の今までの歴史ですけれども、実は徳島県の新徳島県民運動の中で平成3年ですか、誕生いたしました、当時は15名でありました。それからかなり発達して、一番多いときに60名ぐらいのメンバーになりましたけれども、もう現在は高齢化も進んできて35名で活動しております。平均年齢で言いますと75歳ということで、私がまだ若手のほうということで、高齢者では90代が2人おります。

主な活動といたしましては、「人形文化の保全、伝承」それと「恐竜の化石、資源の保全」、「都市と農村の交流」、「地方公共団体の受託業務」という4つの柱を事業としてやっております。

人形文化の保全。受付でおひなさまのチラシを受け取っていただいた方もおられると思いますが、もう35年間やっております。私はばりばりの行政マンでございます、40年、役場に勤めていた20年間はこの部署にいてもおひな祭りは年休を取ってやっておりました。どこの課長になっても、この時期はひな祭りをやっておりました。それぐらいひな祭り中心の人生でございます。このおひなさんは全国から集まってきます。今年でしたら400件、1万5,000体ぐらい集まってきます。遠くからは全部宅急便で送られております。会場には高さ8メートルのひな壇、25段を4面に組んだ100段びなということで、それがメインで35年間出しております、人形は増えて増えて、実際は10万體ぐらい保管していると思っております。

なぜこの勝浦町に日本一のひな祭りが始まったかということをお話ししますが、41年前の昭和56年に四国では珍しい大寒波になりました。

当時国の激甚災害を受けまして「もう町の職員は一切派手なことするな」と町長から当時命令がありまして。一切4～5年はなにもしなくて、もうじっと我慢していたんですが、このままでは町が逼塞（ひっそく）してしまうということで町の有志10人でグループを作りまして、全国発信ができる何か大イベントをやろうということで3年間勉強会をしまして、最後に落ち着いたのがこのひな祭りを利用したイベントであります。これは最初非常に不安でした。お人形がどれぐらい集まるかなってということがあったんですけども、毎年やるごとにもう増えて増えて、これは町の職員だけでは無理だ、ということで、3回目でギブアップをさせていただきました。ちょうどそのときに「勝浦井戸端塾」がすでに誕生いたしておりまして私もスタッフでしたので、それだったら井戸端塾でやろうってということで、ここで民間に切り替えたことが今日の発展、先ほど言われたように行政ではこれだけ伸びていないと私は思っています。やっぱり民間が自由にやって、このひな祭りがだんだん大きくなったなって思っております。

このひな祭りがもう大きくなって、全国発信されるようになりました。すると、全国から「おひなさん、いただけないか」という問い合わせがありまして、いろいろなところに愛知県の足助町とか、千葉の勝浦市、同じ勝浦はネットワークを組んでおりますので送って、ひな祭りが今全国10数カ所ですらやってると思っております、それぐらいおひなさんに対する日本人の心が、これが成功の秘訣だと私は思っておりますし、町全体がおひなさんの時期には、商店街の各地区で飾られます。奥座敷があったり、3つの商店街、もう全てお人形が並ぶというような町民を上げての今現在ひな祭りになっております。コロナがありましたが、一時中断したり、そういうことはありますけれども、コロナの完全な対策をしてやってきましたので、1回も止まることなく今まで続けられたことが非常に私たちの自慢でもあります。

それと、日本から世界ということで、実は「全国ひな祭りサミット」というのを開きました。もう全国におひなさんが拡がっていたので、1回サミットやろうということで全国20数県から参画がありまして、九州からは「九州ひな祭り広域振興協議会」というのがございまして、6県12地区から参画がありました。熊本県からは人吉市から参加をしていただきまして、本当にありがたいなと思っております。

一番世界発信で大きかったのは2016年のリオデジャネイロオリンピックでおひなさんを飾れたことです。これも国のほうから話をいただきまして「日本の文化として紹介したいので、協力してもらえないか」ということで、もう喜んで参画しまして、東京から3,000体のおひなさんを1カ月かけてひな壇とともに送りました。私たちも、7人ぐらいが飾り付けに行きまして、2カ月間リオで飾り付けて、あとはリオのほうで利用してくださいということで、いまだに飾られているという写真が私たちのところに届いております。このひな祭り、準備が大変なんです。ボランティアもたくさん入っていただいておりますし、準備に2カ月かかるんです。平均年齢75歳で2カ月というのは大変なんですけれども、ボランティアがたくさん手伝ってくださって。小学生とか保育園の方もコーナーを設けて飾り付けしていただいておりますし、県のほうの事業で「ふるさと応援し隊」というのがありまして、毎年20人ぐらい応援に来ていただけて、非常に皆さん動いてくれますので、毎年お願いをしております。

人形がつなぐ交流活動ですけれども、人形の里親制度っていうものを作っております。この一番のきっかけは、淡路大震災があったときに、「震災で人形が燃えたから、分けてくれないだろうか」ということで、「あ、これはこういうことに役立てよう」ということで里親制度を作って、国内はもとより外国のほうにまでも今行っております。県内は、空港を始め、県の大きな施設はほとんど飾ってくれないかとい

うことで、私のほうもPRになりますので喜んで飾りますということで、県庁とかいろいろなところで飾っておりますし、先ほど言いましたように勝浦ネットワークで各勝浦関係の町村に行っています。

一番大きかったのは、宮城県、大震災の後、非常に仮設住宅がさみしいということで「お人形で心を癒したい」という話が飛び込んできました。私たちは、今までお金とかで支援していたんですが、「これは人形で支援ができるぞ」ということで、南三陸に直接行って、私は4～5回行ってはいますが、人形飾ったら、もう飾っているところから涙を流されて、「お人形さんに会えた」ということで、非常に私も行って感動させていただきました。それと、インバウンド。皆さんもインバウンドに関わっていると思いますが、香港と台湾、これも県の事業で行きました。以上が人形関係です。

次に、恐竜化石ということで、途中御船も通ってきましたが、御船の博物館も行きましたけれども、うちの町では平成6年、28年前ですか、四国で初めてイグアノドンが化石が発見されて。うちの井戸端塾もすぐに飛びついたんですね。これはおひなさんもあるけど、恐竜も面白いていうことで、恐竜の里作りをやりました。それからしばらく化石が出なかったんですけども、ここ数年ボーンベッドが出たんですね。ボーンベッドというのは恐竜含有層のことで、もう長いこと層が出ています。で、掘ったら必ず恐竜の化石が出ています。今20数点出ていると思いますが、うちの町これから恐竜が主流になるかなと。恐竜も魅力があるということで、今「にっぽん恐竜協議会」というのができています。9町村ぐらい入って、御船町さんも入るとは思いますけれども、おひなさんと恐竜、おひなさんは春先ですね、恐竜は夏場ということで、年間通じて活動ができております。

最後になりますが、町の受託事業として「道の駅ひなの里」。こことひな祭り会場が隣接していますので、ここを中心に年間を通した事業が

組めております。皆さんと同じようにSNSで情報発信していますし、ふるさと納税も道の駅で受けていますので、これから伸ばしていきたいなと思っております。

まとめとして、一番嬉しかったことはひな祭りとか恐竜を中心に町全体がいろいろなイベントが出てきたということが私は非常に成果があったなと思っております。それと私個人的には、約41年間、おひなさんに関わってきました。おかげで全国に100人を超える仲間ができました。コロナ禍ではあったんですが、4年前の平成30年に玉名市で全国祭り交流会がありまして、私は日本の会でも外国行っても阿波踊りが好きですから踊るんですが、阿波踊りの力もすごいなと思っております。

ちょうど時間となりました。ご清聴ありがとうございました。

図司／稲井さん、国清さん、どうもありがとうございました。井戸端塾の活動、30年を超える長い期間ですけれども、同じことをやっているというよりも、アップサイクルみたいな資源の利活用みたいなところを考えていながら、広がりを持ってさらに前進されているところが、いろいろと学ぶところかなと思います。どうもありがとうございました。

続きまして、全国過疎地域連盟会長賞を受賞されました「特定非営利活動法人あったかいよう」から「とくしま南を、海が見える「あったかい」まちに」ということでお話をいただきます。よろしく申し上げます。

特定非営利活動法人あったかいよう

(徳島県海陽町)

とくしま南を、海が見える「あったかい」まちに

笠原／皆さんこんにちは。NPO 法人あったかいようです。私たちは、DMV 世界初が走る町、海陽町からやって参りました、前理事長の笠原まりです。

ラフォンテーヌ／現理事長のラフォンテーヌ裕子です。よろしくお願いいたします。

笠原／まず、私たちが活動している徳島県海陽町について説明させていただきます。私たち海陽町は、徳島県の最南端に位置して令和2年の国勢調査では人口8,358人、まさに今日本の課題である人口減少真っただ中の町でございます。国道55号線を中心とし、山間部や道沿いに集落があり、太平洋に流れ込む川の恩恵を受けた第一次産業が基盤となり、海部刀、きゅうりタウン、大敷網や、サーフィンの聖地として自然に恵まれた環境の町でございます。

「NPO 法人あったかいよう」は、海陽町まち・みらい課の住民参画事業としまして、いろんな課題意識を持った町民、当初54名が集まりまして6つの部会に分かれ、1年間月に1～2回集まって熱心に協議を進めた結果、「町のためにこういうことがやりたい。でも活動を展開する拠点が無いよね」というところで立ち上がり、平成28年8月25日に無事設立いたしました。今、令和4年で6年目。10人のうち6人、7人高齢者という高齢の町でありながら、私たち「NPO 法人あったかいよう」会員41名の平均年齢は45歳、うち8名以上はなんと町外から嫁いでこられた方とか、移住者の方で構成されております。私たちは徳島南を海が見えるあったかい町に自分たちでやれることをやっていこうという

ことで、3つの柱、1番「にぎわいづくり」、2番「人材育成」、3番「移住者支援」と活動を展開しております。

1番、「にぎわいづくり」の「多世代交流」におきましては、交通手段がなく引きこもりがちな人のイベント送迎を目的として始まった事業の一例でございます。コロナ禍の中でも万全の対策をし、できることをやろうと実施した事業でございます。「体験対応インストラクター」の事業といたしまして、海ならではの海の貝殻やビーチグラスなどを使ったワークショップにインストラクターを派遣したり、県内外のお客さまの対応、県内外の修学旅行生対応に、藍染めの体験の対応をしたり、海ならではの活動の対応をさせていただいております。そして、DMV 発着となる阿波海南文化村におきまして、藍染め体験、小物作り体験などの体験メニューをあったかいようの会員を中心として開発させていただき、インストラクターのスキルアップも図りながら、今現在も DMV に乗りに来たお客さまに体験対応をさせていただいております。

やはり過疎の町、「だんだんと人口が減っていくよね。もっと賑わったらいいいよね」というところで、関係人口、交流人口を増やすための、また、町の魅力を発信するためのガイドインストラクター事業もあったかいようが立ち上がる前、有志ボランティアが集まって始まりました。毎年、外部から講師を招き、また近隣ガイドの方たちの交流も兼ね、スキルアップを図る講習も継続して開いております。こちら DMV 試走に合わせて、花を咲かせる観光協会の事業に賛同し、田んぼの整地や種まきイベントを「NPO 法人あったかいよう」が企画、開催し、地域の皆さんと一緒にひまわり畑を実現させた映像でございます。人口減の町、周りの海部郡、6つの町が合併して3つの町でできた海部郡なんですけど、そこに3つあった高校が人口減のため1つの高校になりまして、徳島県立海部高校となりました。そこの海部高校生とか小中生と一緒にホテル前の花壇を整備し、花を咲かせた

り、露店活動、またハロウィンのイベントなど企画、実践し、賑わいづくりを進めております。

2番目の「人材育成」としまして、海の恵みをふんだんに受けている海陽町なので、海への恩返しとしてビーチクリーン活動や、拾ってきた海ゴミを地域の子どもたちと分析したり、オブジェなども作って地域の皆さまと学びを深めております。そして、ひとり親家庭の方も昨今多ございまして、ご家庭のほうにお伺いしましたら、やはり食が課題であるということが分かりましたので、親子に優しい調理実習を実践し、今でもフードバンクとか海部高校生の寮生、県外から来た高校生に休日に食事サポートもしているんですが、そこにいただいた食材を使い切れないものはもったいないので、ひとり親家庭の方にも配らせていただいております。

地域の皆さまに地元の歴史を学び、伝えていくことで、町の魅力を見える化し、郷土愛も育もうということで、「あまべ塾」というものを開催させていただいております。歴史継承と申しましてそんなに堅苦しくなく、気安くカフェ形式で歴史を深める情報交換の場を2~3カ月に1回ぐらいのペースで現在も実施させていただいております。

3番目の「移住者支援」は、あったかいようが海陽町役場と協力し合いながら進めている事業でございます。「いもちの家」というお試し住宅を運営し、そこで地元小学生と壁塗り体験などのDIY体験や、高校生の県外生の休日食事サポートの場所としても利用させてもらったり、活用しております。移住フェア、相談会、どこの町も行かれていると思うのですが、コロナ禍ではZoomが多かったのですが、今年度は大阪や東京のフェアに現地参加し、町役場の方も一緒になって面談対応をしております。設立当初、平成28年度には2件だった相談件数が、なんと令和3年度、昨年度には61件に増えました。また、「いもちの家」をご利用いただいた方が2件定住を決められました。そういう功績もあります。「移住者支援」の一環といたし

まして、私たちの特徴かなと思うのですが、町役場と一緒に空き家の発掘を行い、空き家バンクの登録のサポートや片付けサポートをしたり、こちらも町役場と一緒に移住者の方への空き家案内も行っております。

ラフォンテーヌ／移住者の方とともに地元住民の交流の場として、「ミートアップ」というイベントを催したり、月に一度在住外国人に活躍していただくために、在住外国人の方に講師になっていただいて、月に一度語学カフェというものを開催しています。また、技能実習生やALTの先生などに文化体験をしていただいたり、日本語の学習をサポートしている日本語教室も週に一度開催しています。

笠原／自分たちの活動だけに留まることなく、町外の良いところも取り入れていこうと現地に伺ったり、同じような活動をしている先輩を講師にお迎えして学びを深め続けております。

私たちは楽しい気持ちが一番。遊びながらやっというところをすごく大事にしております。遊びながらといっても、ちゃんとルールは踏まえるようにしておりますので、ご安心ください。やらされるのではなく、より良い町づくりのために自分たちができることやっという、考えていこうというふうに活動を継続しております。誰かのためだけでなく、自分のためだけでなく、誰かのために、自分のために、相矛盾しているようですが、やりたいこと、いろんなことができる環境の海陽町。本当に会員みんなも「あれやろう、これやろう」といってくれたら行政の方もサポートしてくれたり、関係機関もサポートしてくださって、やりたいことを思いっきりやれる環境で事業を進めさせていただいております。これもひとえに、やはり人のつながり。昨日の会でもそういうお話があったと思うんですけど、やはりどこに行っても人、人が大事だなと。みんなに好かれるっていうのはほんとに難しいと思うんです

が、できるだけいろんな人と関わって、いろんな人生経験を積んで、あったかい町海陽町にいてよかったなって思えるような活動が継続できたらいいなと思っております。

これで私たちの発表を終了させていただきます。InstagramとかFacebookとかもやっておりますので、ぜひフォローお願いいたします。ありがとうございました。

ラフォンテーヌ／ありがとうございました。

図司／ありがとうございました。昨日のパネルディスカッションの中でも馬袋さんが言われていましたけど、「マスト」と「ウィル」の話ですよね。地域の話と、やりたいっていう個人、内発的な気持ち、チャレンジの気持ちとのバランスをよく参加できるプラットフォームと言うんでしょうかね、場を作られて。あんまりぎすぎすしてないですね。そんなことを感じました。

続きまして、総務大臣賞を受賞されました「くにさき地域応援協議会寄ろう会（よろうえ）」から「地域づくり支えあい活動共通 WEB サイト“国東つながる暮らし”（海・山・川・歴史・そして繋がる人々の暮らし）」をテーマに、お話をいただきます。よろしく申し上げます。

くにさき地域応援協議会寄ろう会

（大分県国東市）

地域づくり支えあい活動共通 WEB サイト“国東つながる暮らし”（海・山・川・歴史・そして繋がる人々の暮らし）

野田／皆さんおはようございます。「くにさき地域応援協議会寄ろう会」の委員長をしております、野田敏広と申します。この度は、過疎地域持続的発展優良事例表彰において、栄えある総務大臣賞受賞ということで、非常に感謝をいたしているところであります。

そして、この「寄ろう会」という言葉の意味

なのですが、これは大分県の特に国東地方の方言で私たちは「寄ろう会」という意味を、皆さんに集まっていたいてぎっくばらん（くまもと）に話をしたいこうという、とにかく集まろうという意味の言葉と理解しています。この「寄ろう会」は平成30年に設立して、最初は6団体だったのですが、今は12団体に増えています。国東市は極端な人口減少、少子高齢化の地区なのです。旧小学校区単位の生活圏の中で、支え合い活動団体の集まり、横の連絡・情報共有をする中でいろいろと事業を実施いたしております。取組みを進める中で人口減少、高齢化、その中で近隣地域の支え合いを大切にする事が重要ですが、各地区で思いとか地域課題が違いますので、支え合い活動の目的を共通に理解し合って、これからの住みやすい地域づくりを目指して、少子高齢化の中で健康寿命の増進等につながる活動をしている国東市内の協議会を応援する団体です。

私ども一同は今回の賞を栄誉の励みとしてこれからも一層活動に邁進していきたいと思っております。皆さんのご協力等を得ながら将来につなげていきたいなと思っております。本当にどうもありがとうございます。

あとは、事務担当のほうから詳しく説明をいたします。

松本／国東市社会福祉協議会の松本と申します。私のほうが国東市の概要と、取組みの概要説明のほうをさせていただきます。よろしく申し上げます。

大分県国東市は、人口が約2万7,000人、大分空港が立地されている地域であります。そんな中、先ほど委員長のほうから話がありました、市内に16の公民館区がある中で、各市内の協議会のみんで集まって話そうねという、「寄ろう会」という協議会があると。その委員長というような形になっております。

国東市のほうでは、地域協議会の活動というところがなかなか進んでいかない中、平成27年の介護保険法の改正がきっかけになり、介護

保険サービスの利用者の軽度の方、事業対象者や要支援の方々のサービス、例えば、訪問介護のホームヘルプのサービスの部分を地域で何か取組んでいけないかというご相談をする中で、地域で買い物支援やゴミ出し支援、そういったものであれば自分たちでも取組んでいける、生活支援ならできるのではないかとこの取組みを進めている状況です。そして、通所介護のほうの部分に関しましては、じゃあ地域で送迎もセットになった、ミニデイサービス、食事会をこの通所介護の部分を地域で担っていけるということで、国東市の支え合い活動がスタートしていったという状況です。そんな中、平成28年からスタートしていく中で、1年に1地区を目安に、会長が所属する「あらたに会」、そして「かもめ」、1年に1地区ずつ協議会で支え合いの活動、生活支援の取組みが進んでいった状況でありました。

この支え合いに関しましては、社協の生活支援コーディネーター6名の体制で、地域に伴走する形で取組みを進めている中、市内で少しずつ活動が広がり、社協の職員だけではマンパワー不足もありまして。あとは地域のほうからも地域の観光マップや商品開発とか、地域の資源を活用した商品開発をしていきたいという中で、私どもの福祉の視点だけではなかなか難しい現状もある中で、地域おこし協力隊の方の力や実際に国東市のほうに移住、定住されてきた方は、国東市を外からの視点で見られて、地域の方に対しても非常に有効なアドバイスとか、いろんな助言や支援でご活躍がいただけるということで、私どもは福祉の視点のコーディネーター、そして国東市のほうは令和3年度から地域活性の視点も含めた地域支援サポーターの方々と一緒に地域の活動を支援している状況です。そして、隣にいらっしゃいます武井さんが、令和3年度に「地域支援サポーター」という形で活動をいただいている状況です。

その中で、こういった地域の支え合い活動が非常にいい活動をしているので、情報共有や情

報発信のツールとして、「国東つながる暮らし」というウェブサイトの立ち上げの企画立案をいただく中で、「国東つながる暮らし」のウェブサイトの中にInstagramというアプリを入れて、Instagramの更新を、地域住民の方に更新をしてもらおうと。そのためのスマホ教室の展開をしている状況になっております。あとは、私どもがこの福祉の視点で高齢者支援を取組んでいきませんかというような視点で、進んできましたが、なかなか地域のほうと取組みが進んでいくのがこれ以上ちょっと難しい段階にきた中で、このウェブサイトをきっかけに、地域でスマホ教室をやってみませんかという事で、「それだったらちょっと話を聞いてみようか、取組んでみようか」ということで、今スマホ教室とかウェブサイトを通じて地域協議会との関係づくりを進める中で取組みを進めている現状になっております。

武井／それでは、ここから私がお説明させていただきます。元地域支援サポーターの武井と申します。私は6年前に東京から国東市に移住して参りました。本業は民泊宿泊業で、現在は「地域の国見ふるさと展示館」という市の施設の運営を始めてしまったので、ちょっと地域支援サポーターとの両立が難しくなり、今は準地域支援サポーターという形で一応名前だけ残っているような感じです。ホームページ制作経緯のご紹介を時間がないのでかいつまんでさせていただきます。

私は、移住した翌年から地域の高齢者支援のための組織、支え合いの会、立ち上げからスタッフとして関わらせていただきました。その中でだんだんと課題が見えてきました。これは過疎地の皆さんのところと共通の課題ではないかと思うのですが、いろいろ活動していてもその活動が地域においてなかなか周知されないということ。あと、高齢者の居場所作りとしてカフェを開催していたのですが、その利用者が固定化、低迷していたこと。あと、役員スタッフ間の情

報共有が難しいこと。あと、後継者が増えない。あと、補助金で運営していましたが、やはり補助金ですと使用用途が縛られますので、特に人件費など融通が利かないので、自主財源を確保する必要が今後あるだろうということ。あと、時間が経つにつれてどうしてもスタッフのモチベーションが低下してしまうこと。あと、他の支え合いの会との情報共有手段がなかったということ。そういう情報の伝達手段が紙とか電話ベースですので、他の会の動向も迅速に見えないので、対応が遅れるような問題が見えてきました。

そのため、ウィークデーに開催していたカフェを日曜日に開催して、私の娘がその当時小学生だったのですけれども、同級生に声をかけて子どもに出店してもらったりして、動員数来場数を増やしたり。あと、私は東京にいるころから薬草を探して摘んでいたのですが、国東市に来てみたらただで目の前に、わーっと広がってしまっています。これはいいじゃないかということで支え合いの会に話をもちかけて、薬草茶を売らしようって。そして、薬草茶の販売を始めたのですが、コロナ禍に突入してしまって各活動が中止を余儀なくされました。そのことにより、ますます課題が深刻になってきました。

そんな折、2020年に「地域支援サポーター」に委嘱いただいて、早速市内全部の支え合いの会共通のホームページ制作を提案させていただきました。具体的な目標といたしましては、会内外の情報共有と情報発信。それと、SNSを活用するというのと、イベントの開催。あと、ショップページを設けて販売などを通じてモチベーションの維持と向上。やはり第三者からの反応とか評価、あるいはふれあいってというのは、皆さんのモチベーションの向上につながると思ったからです。あと、イベントは開催するとモチベーションの維持につながりますが、イベントそのものが商品となるということ。参加料が自主財源につながるっていうのと、商品をもっと売って上げることによる自主財源の確保。

あと、何か商品を作ろうというときに、地元に関わりたいものはないかという地元の資源を見つけ出そうという視点を持つということにもつながるかと思います。あと、移住を考える方々への情報発信。これら総合して、国東市の生の生きた情報の発信となり、最終的には移住促進につながることを目的としました。あともう1つが、役員スタッフの方々、国東市は高齢化率が45%で、地域にいるともう90%じゃないかって感じるのですが、役員スタッフの方々もほとんどの方が高齢です。65歳以上の方々です。60代だともう最若手。私はぎりぎり50代なのですけれども、もちろん最若手。ということでこの方々は、もうまもなく高齢者予備軍、支えられる側に回りますので、そういった方々にインターネットやスマホに親しんでおいていただくということをずっと私としては重要な目的としていました。これは、地域活性とか、高齢者支援とか、あるいは観光促進、移住促進、これをばらばらに活動するには地域にはもうマンパワーが足りません。それをばらばらにやっていると無駄もおきますし、人もいないので、これを包括的に展開することを視野に入れて、このホームページを作成しました。

2021年に県の補助金をいただきましてホームページを完成させて、早速スマホ教室の開催を始めました。ショップページだけは市のほうで補助金を出してくださるということで、こちらは翌2022年に追加しました。ホームページのご紹介をさせていただきます。「国東つながる暮らし」のトップページには、支え合いの会の役員スタッフの方々がインスタを上げたものうち、3つを選んで載せています。タグとしては3つに分けたのですが、「暮らしのあれこれ」というのは、普段皆さん暮らしの中の何気ないことを載せていただくところです。「活動の様子」というところは、支え合いの会の活動の様子を載せていただいています。あと、「地域の暮らしの仕組み」というのは、これは移住を考える方に参考になるような、例えばこの自治

会はこんな感じでやっているとか、草刈りが年に何回あるとか、ここの水は地下水ですとか、水道ですとか。そんな、地域の暮らしの仕組みが分かるような、生の情報をここに載せていただいています。

次に、地域の人々ということ、各会、ここをクリックするとそれぞれの会のページに飛びます。「寄ろう会」トップページのお知らせ、これは全体のお知らせになります。一番下に国東に暮らすということで、移住者ブログを載せています。これは我々移住者ですとか、Uターンした人たちが交代で書いています。早速この1つの会に行ってみますが、野田会長のいらっしゃる「あらたに会」。これが会それぞれのページになるのですが、ここでは選ぶことなくもう時系列的に新しい、皆さんがアップしたインスタがもう自動で飛ぶようになっています。なので、最新なのもう順次ここに上がるようになっています。その下に新しいお知らせですとか、あと活動内容。各会によってやっぱり微妙に違いますので、活動内容がこちらに書いてあります。最後にはカレンダー。ここのカレンダーは、会だけ、あるいは近隣の方だけが参加できるようなカレンダーがここに表示されています。1つ1つをクリックすると詳しいことが分かるようになっています。で、それぞれの会のページがあって、あと「イベント体験ツアー」というところがあるのですが、これ早速全国過疎問題シンポジウムのことが載っていますけれど、最近いろんなイベントを各会が立ち上げたりしているのですが、やはりコロナの状況によって延期したり中止したり、なかなか思うようにいかない点もあるのですが、各会が工夫していろいろなイベントを立ち上げています。フットパスもやっております。ここに上げるイベントは、会だけではなく市内外どなたでも参加できるものをここに載せています。

その他にオンラインショップ。ここではそれぞれの会が作っている商品をこちらで買えるようにしております。以上、簡単なご説明にな

るのですが、このホームページは先ほど申し上げましたように様々な意図で作成したのですが、発信の場があるということだけでも会のモチベーション維持させるツールになっているかなと思います。活動を充実させて、充実させるとそれがひいてはホームページの充実につながって、そうすると反響や自主財源にも自然とつながると。逆に、ホームページを充実させるために活動を充実させましょうみたいなことも、逆も起こり得ます。特に、やはりスマホ教室は、スタッフのモチベーション向上につながっているかなと思います。最初スマホ教室を始めたときには、まずはこのホームページの操作方法を皆さんにお教えするのですが、それが行き渡った後は、身近なLINEの操作方法ですとか、あとは写真加工の操作方法ですとかやりますと、皆さんとても喜んで、「楽しかったわ」といって帰られます。そういう皆さんが楽しんでいただいただけではなくて、先ほどご説明ありましたように、スマホ教室の開催が、それでつながりができて、支え合いの会の立ち上げにつながっていくというようなケースも起きています。私は、このホームページは決してゴールだとは思ってなくて、これを充実させていくことが会の活動の充実にもつながるかなと思っています。この先にはネットシステムの構築だと考えていまして、そのためにもこのホームページは次期高齢者になる皆さんがインターネットやスマホに親しんでいただいて、ハードルを下げおくために必要だと思って作成いたしました。

私の説明は以上となります。

本日はご清聴ありがとうございました。

図司／ありがとうございました。昨日のパネルディスカッションの中でデジタルの活用の仕方ということが1つ論点にもなりましたが、まさに手段に溺れるというよりも、仕組み作りのところから丁寧にやられている、まさに実践のお話かなというふうに思って聞かせていただ

きました。どうもありがとうございました。

それでは、続いて最後のご報告になりますが、まさにここ地元の美里町の取組みとして、「美里フットパス協会」から「地域を元気にする魔法フットパス～交流人口を増やすから walkers are Welcome へ～」というお話いただきます。よろしくお祈いします。

美里フットパス協会

(熊本県美里町)

地域を元気にする魔法 フットパス
～交流人口を増やすから
Walkers are Welcome へ～

井澤／こんにちは。「美里フットパス協会」の会長をやっております、井澤と申します。よろしくお祈いします。

美里町は、今日皆さんが来られたように来やすいです。高速道路の入口が4つか5つ20分圏内にありますし、新幹線も熊本駅、新八代駅があります。ただ、来やすい分去りやすいので、通過型だったんです。このごろは、美里町に行こうと目的地になっています。皆さんも、今日「美里町に行こう」という目的地として来られました。ありがとうございます。

なぜ私たちがフットパスを始めたのかというと、「美里町をどうにかしたい」というただ民間の人たちの、もちろん行政の職員さんも、全員個人の立場で「どうにかしたいね」と言っただけを勉強会をしていたんです。でも、勉強会だけが続けていてもどうにもならないよねってうとき、2010年に仲間の濱田さんがフットパスを紹介しました。じゃあ、フットパスをやろうということになりました。「フットパスが目的じゃないよね。」私たちは交流人口を増やす、その当時は関係人口という言葉がなかったんですよ。「交流人口を増やす」そのツールとしてのフットパスをスタートさせました。目的は交

流人口を増やそうとホワイトボードに書きました。目的は明確にシンプルにしたほうが説明もしやすいし、聞く人も理解しやすい。そして、誰も反対しない、誰でも参加できる、それは大事だと思います。

フットパスのことを調べると、日本フットパス協会のホームページの中に、「地域のありのままの風景を楽しみながら歩くことができる小径」と書いてありました。この「ありのまま」は、作らない、壊さない、だから経費がかからない。私たち、民間で始めましたので、これは重要でした。そのありのままの風景っていうのはなんなのかって言うと、地域の人たちが今まで生業の中で維持管理してきたものです。地域の人たちが維持管理をしてきた生活圏の中を歩かせていただくのがフットパス。地域の日常が歩きに来た人にとっては非日常になります。だけどイベントではない、歩く文化の創造を目指すという大きな目標を掲げました。

そのとき、いろんな補助制度をうまく活用して、作業がだぶらないように、だけどころな活動にメンバーが入るようにしました。私たちは「もの好きのかんなしだ（もの好きの考えなしだ）」と言われたのですが、私たちは美里町をどうにかしたいなということで動き始めていました。コースづくりで歩きに行くといろんな道がありました。私たちは車で行くので車の道はよく知っているんですけど、小さい集落の中の道は全然知らなかったんです。地域の人たちが教えてくれた道を楽しく歩けるようなコースにつなぎました。今でも覚えています。歩きに行ったとき、最初に出会ったおじちゃんに「パンクしたつかい？」って言われました。歩く人なんて全然いないんです。次に、女性2人組には、「車が故障したつかい？」っていうふうに言われました。私が歩いてさえ、そういうふうに声かけられるので、これが都会の人たちがリュックとか背負って歩いたら絶対注目されるなって確信しました。

だけど、あんまり目標は高くはしない。「こ

んなに歩く人は誰もいないから、10人も歩きに来ればいいよね」ぐらいの話をしながら、私たちはコース作りを進めました。1つのコースを作りあげるのに、歩くのが10回以下っていうことはありませんでした。何回も何回も歩きに行く、それがすごく大事でした。出会った地域の人たちに、「いい道はありませんか？」って聞きます。そしたら「あの道がどうだ」「この道はどうだ」っていろんな道を教えてください。教えてくれたらコース作りの参画者。縁側カフェでお茶を出してくれたら、イベントの参画者。「何やってる？」から説明を聞いてくれたら、フットパスの理解者から協力者になっていきます。「こんにちは」と言って「こんにちは」と返してくれたら、それがおもてなしなんです。草切りとか花植えをするのは、フットパスの理解者、推進者です。

地域の人たちが日常使う道を私たちはうまくつないで楽しく歩けるコースにしました。最初の2年間で10コース、3年目に5コース。15コースでスタートしました。マップはただで配布はしません、販売しています。ただで貰うよりも買ったほうが捨てるに大事にするからです。そして、一種のフィルタリングだと思っています。買ってでも歩きたいっていう人に歩きに来てほしいと思っています。マップ作りには妥協はしませんでした。それは、コースの写真を集めるのにも1年以上かかるからです。美里フットパス協会設立の4月1日に販売開始する予定が6月にずれこみました。コースには道標と、2色リボンを下げています。これは、立てるときに地域の人たちをお願いします。「ここに立てていいですか？」って聞くと「いいよ」って言ってくれます。「邪魔になるときは声かけてくださいね」って言うと、「そのときは俺たちがちゃんと立て直すとくよ」。サインのリボンも木の枝につけさせてもらっていますが、「草刈りをしたら落としてしまったから、代わりのものを取りに来た」と事務所に来られるようになりました。新しく角材の道標を立てに行ったとき

地域の人が言ったのが、「刈払機で草刈るとき、この柱だったら太くて丈夫だからいいよね」って言ってくれました。それだけ草切りとかして関わってくれているからです。

「歩く」ことは、スピード感が違うので、見えるもの触るものの量とか質が違います。五感も使えるのでスピードがどうしても遅くなります。フットパスの歩き方は、寄り道、道草、回り道の楽しさです。だから、滞在時間が長くなります。また、自分のスピードに合わせて歩けるから、旅のニーズを満たす、心と体の健康になるなどすごく満足度が高いです。「フットパスの歩き方はなんね？」ってよく地域の人に聞かれます。フットパスとはイギリス発祥で云々と説明をするよりも、「『鶴瓶の家族に乾杯』、『ブラタモリ』、『ダーツの旅』みたいなものよ」って言うと（あんまりよく分からないけど）「あー」となります。出会った地域の人と会話して、何か興味を持ったらしっかりそこに行くってというのが、ちゃんと伝わるようになりました。フットパスとはなんぞやよりも、『鶴瓶の家族に乾杯』とか、『ブラタモリ』の歩き方っていうと、地域の人がよく理解してくれました。研究者ではないので、そっちでもいいのかなと思います。

先ほど旅のニーズと言いましたが、フットパスを始めたころ、美里フットパスに何を求めて来るのか？のアンケートを行いましたところ、風景（棚田だったり、石橋だったり、もう全てだったり）。それから、交流（一番に地域の人との交流、次が一緒に歩く人との交流、ガイドとの交流）でした。ガイドは3番目なんです。それから食べもの。食に特化したモニターツアーをやりました。「美里にわざわざ歩きに来て、毎日食べている唐揚げやハンバーグやスパゲッティはいらない」という結果でした。そこで、美里産の材料で、地域の人たちの手作りで、フットパス弁当とか、食の体験とか、縁側カフェにつながって行きました。何を求めて来るかっていうのをしっかり踏まえて始めるのが、すごく大事なかなと思いました。

「美里町といたら？」みなさんはどう感じましたか？これは久留米大学と大阪の阪南大学の学生が言ったことですが、「山の中」「水がきれいだ」「自然」「棚田」「石橋」とかなんです。私的には、もっと山奥を知っているのだから山の中だとは思ってなかったのに、初めて来た人は山の中だって思う、だったら、山の中らしいことも、ありのままです。

過疎地と言われるところはどこでも、不便だ、ネット環境が悪い等々、もういろいろ言われます。マイナスのイメージで言われることが多いのですが、実はそれが歩きに活かせる豊かな地域の資源です。それに、気付くことなんですよ。そして、歩きに來る人々が地域に活力をもたらす大事なお宝です。

最初のころは、「歩くことなら別にフットパスでなくともよかろうもん」とか、「イギリスのフットパスとは違うよ」とかっていう大学の先生もいました。私たちはイギリスのフットパスのフレーム、枠組みを使って私たちのいいようにうまく変更して作っている、イギリスのフットパスとは別のものです。私たちがやっているのは、イギリスのヘブデンブリッジが始めた、「walkers are Welcome town」私たちの町は歩く人たちを歓迎しますよっていうことです。だから、美里町全部が歩く人たちを歓迎します。コースがあるところだけじゃなくて、美里町全部がちゃんと歓迎してくれます。昨日、午後から歩くコースの下見をしたんですけど草を刈ってあるから、こっちにも歩きたい、あっちにも歩いてほしいと思うんですけど、時間がないのが悲しいですね。地域の方の関わり方は、ありのままから始まって、歩きに來る人がいるなら、花を植えよう、草を切ろう、で自主的な動きになっています。「良いところですね」とって感動の言葉が返ってきます。生活圏を歩かせていただくから「ありがとうございます」「お邪魔しました」と言うと、地域の人から「またおいで」とって言葉が返ってきます。数値化はできないですけど、フリーで歩く人たちが多

いのを地域の人たちがちゃんと実感しています。

フットパスを始めて一番感動したのは、「ばばも出る幕があります」とっていうおばあちゃん言葉です。私たちは、高齢者は労わるべきという意味で、出番とか主役の座をもしかしたら奪っていたのかもしれないと進めていく中で気付きました。だから、地域の人たちができる部分はちゃんと地域の人たちにやってもらう、役割分担は大事です。

これはフットパスを歩きに來た方が書いてくれた感想文です。フットパスコースがあるということは、観光地ではないってところの「歩きに來てもいいよ」「入ってきてもいいよ」とって分かりやすいサインだと言ってくれました。これがフットパスを進めていく中で、地域の人たちに「こんな感じで、來る人は思っているからね」コース作りの助けになりました。その方たちがフットパスに参加して、ブログとかSNSにアップしてくれるんですよ。私たちがいろいろするよりも、実際に歩きに來た人たちが発信してくれるので、すごく助かりました。フットパス愛好家。歩中（あるちゅう）クラブって私は呼んでいるんですけど、歩くの大好きな人たちに聞いたら、フットパスの魅力は楽しいの先にまた楽しいがあると言います。歩く楽しさ、見る楽しさ、出会う楽しさ、食べる楽しさ、それから仲間と一緒に歩く楽しさ、まさに、歩中の人たちです。

町内の業者にフットパス弁当をお願いしました。これは食のモニターをして、ハンバーグとか唐揚げとかコロケとかスパゲッティはいらないよっていうのをちゃんと受けて、業者さんに美里産の食材で容器は竹皮制に統一して作ってもらっています。

また、歩かせていただくならば地域が潤う仕組みとして、縁側カフェとか食の体験をやっています。おばあちゃんたちの出番なんですよ。これが高齢者の人たちが、「いつも1人分しか作れてなかったけど、今日は20人分作れて楽しい」と、食べる楽しみもだけど、食べさせる

楽しみもあるのだなっていうのを実感しました。村のお祭りのとき料理を作って持ち寄って食べていたのを再現してもらっているのが、食の体験です。参加者も地域の人と一緒に食べます。ただ、コロナ禍でできないのは残念ですけど、早くどうにかしてやりたいなと思っています。これがおもてなしかっていうと、違うんですよね。これは地域が潤う小さな仕組みです。おもてなしと地域が潤う小さな仕組みを勘違いしない、田舎に行くと、おもてなしってお茶を飲ませてくれるのが当たり前になってしまいがちです。都会の真ん中でよその家、お店に行ってただ座っただけでも、お金取られます。地域が潤う仕組みは、地域の人も理解してほしいなと思って始めました。おもてなしは生活圏を歩かせてくれる、仕事場、農道だったり水路の管理道路だったりを歩かせることです。それから、地域の人たちが定期的にする公役での道路の草切りなどです。コースの草切りは、フットパス協会の私たちはしません、地域の人たちが行っています。最高のおもてなしは、やっぱり話し相手になってくれることですね。

それに慣れてもらうためのきっかけがイベントです。だから美里フットパスのイベントは、春に1年間決めていきます。チラシ（会場に入られたときあったと思いますけど）は1年に1枚しか作りません。地域の祭りや行事に合わせたり、体験を組み合わせています。イベントは歩き方を教えるのがガイドの大きな役割で、地域のファン作りとコースのPRです。そして、セルフで歩くことを勧めています。イベントチラシは年に1回です。なぜかって言うと、まず、節約ですね。それと、イベントのときは美里フットパス協会が主催するけど、これ以外のとき歩くのは、わざわざ美里町に歩きに来た人たちです。今日午後歩いていただくのは、イベント以外にわざわざ歩きに来た人たちだと、美里町の人たちは思います。私たちはイベントにしない地域活性化ということで、セルフで歩くことを勧めています。セルフで歩くと私たちスタッフ

がないから、地域の誰が主役になるかわからない楽しさがあります。地域の人には笑顔と声かけをお願いします。それも「どこから来ましたか?」「フットパスですか?」この2つでいいからねって具体的に言います。「もしも声かけしてトラブルになったら、即警察に言ってください。何かあったらフットパス協会が出ていきますから」と言っていますが、まだ1回も警察から呼ばれたこともありません。よく不審者が歩きに来るのではないかって最初不安に思われますけれど、それは声かけをすることで防ぐことができます。今は、地域の人たちが「フットパスがあるから防犯効果になるね」って言うようになってくれました。

「交流人口を増やす」ツールとしてのフットパスです。だから、交流できないことはしません。800人連れて来たいという大手旅行会社はお断りしました。800人も歩いたら交流どころか地域の迷惑になります。違う旅行会社が400人連れて来たいの時は、「40人を10回にしてくださいませんか?」と提案して、10回として募集して、福岡だったんですけど、5回成立して来てもらいました。

美里フットパス協会はどちらかというとファンクラブみたいなものです。小径を歩きながら楽しむフットパスはもう地域が主役です。セルフで歩くことをずっと勧めています。それは地域の人たちの出番を作るためです。地域にはいろんな人や物や事がありますので、それが歩きによって生きてくるんです。地域の誰もが直接関わることになるので、地域が必然的に元気になります。魔法だと言っているのは、イベントは10回ぐらいしかしませんので、それ以外にセルフで歩きに来る人たちがいるから、地域の人に関わり主役になり、元気になります。

これは昨年のアンケートですけど、歩きにはリフレッシュや健康、交流、食などの目的があり、コースの魅力、風景、交流、食を地域に求めています。10年前とほとんど変わらないし、屋外を歩くニーズはますます増えているような

気がします。視察や研修にこられて必ず聞かれるのが、「歩きに来るのは何人くらいですか？」です。イベント、ガイド依頼、視察、研修など私たちがカウントしている分はちゃんと分かりますが、歩く総数は分かりません。ただ、マップは販売していますので、マップの購入はずっと続いています。これは入場券ではないので1人1枚ではありません。人数の確認はできませんが、ずっと売れ続けているということは、歩きに来る人たちがいるということです。マップは、改訂前は15コース1,500円だったのが、今は16コース1,200円にしています。美里町は日常会話に「フットパス」という言葉が出るので、それはすごいなと思います。そして人が歩きに来るなら、こうしたらいいのではないか、こうするともっと素敵になると花を植えたり藪を切り開いたり具体的な動きになります。歩きに来た人の言葉が地域の人に届いて、地域の魅力に気付いて、自信になって、誇りになって。あんまり好きな言葉じゃないんですけど、シビックプライドの醸成になって、地域の人たちの伸びしろが伸びてきて、色々な活動になってきます。これが「walkers are Welcome」の美里の神髄ですね。

地域の人たちの交流からプラスアルファで食べたり、買ったり、遊んだり、泊まったりすることにつながります。ディズニールランドにはドナルドダックとかいろいろな人がいます。この写真は遠野コースですけど、ここにはドナルドダックとかはいませんが、こういう地域の人たちがちゃんとその役割をしてくれています。私たち美里フットパス協会のスタッフがいないからこそ、こういう人たちの出番があるわけですね。

今は交流人口を増やすから交流人口を減らさないということで、コースとマップのリニューアルをおこないました。また、1年に1つずつ新しいコースを作っています。最初15コースだったのが、今18コース目を県の補助をいただいて作っています。それから、セルフで歩きに来る人たちから休憩場所が欲しいという声が

あったので、縁側カフェというのを始めました。休憩料はいただくけど、場所とお茶だけで、お弁当持ってきてここで食べてもいいですよという形です。チラシがあるので見てください。

フットパスは、いろんな地域や団体とつながっていきます。美里町とイギリスのヘブデンブリッジとのフレンドシップ協定の仮調印は済んでいますけど、コロナ禍でなかなか本調印にイギリスに行けないですね。また、「walkers are Welcome」の動きは、「walkers are Welcome くまもとネットワーク」へ。フットパスだけでなく、九州自然歩道とか、オルレとか、町歩きとか、いろんな歩きを全部ひくくめた、「walkers are Welcome 熊本ネットワーク」という動きになっています。

帰って家族や友人に自慢したくなる体験を作るのは、地域の人たちです。食の体験をした後、私たちが帰るときに地元のみなさんたちが全員道路まで出てきて、「また来年ね」って手を振ってくれたんですよ。もう「絶対また来るよね」って言いながらみんな帰りました。この「美里フットパス」っていうのは、私たちじゃなくて地域の人たちが本当にこの「walkers are Welcome」の動きをしています。だから私は自信を持って言います。「美里フットパス」は最高です。午後のフットパスを楽しみにしてください。終わります。

図司／井澤さん、ありがとうございます。歩くということの深みって言うんでしょうかね。十分に語っていただきました。ありがとうございました。

団体の皆さん、ご発表ありがとうございました。かなり充実をしていて、ほんとは皆さんからも聞きたい話やポイントがたくさんあったかと思いますが、時間も限りがありますので現地に足を運んでいただく、フットパスに関しては午後歩いている中でまたやり取りをしていただくということで、ご容赦ください。

総評として、あまり大きな話を申し上げるつもりはございませんが、やはり昨日の小田切先生の基調講演、そしてそれに続くパネルディスカッションでの議論の内容をまさにどの団体の皆さんも実践のところで表現されているなどというように感じました。

最後の美里のお話にもありましたけれども、住民の方との接点の持ち方って言うんでしょうか。フットパスの話、あるいは「五条ヶ丘推進協議会」の『ゆるキャン△』の中で、来た人たちとの接点というところで、声のかけ方みたいなところを丁寧に「どこから来たの?」とか、あるいは「どこへ行くの?」とか、「こんにちは」とか、そういうことを地域の皆さんにちょっとよその人が気になったら声をかけてくださいみたいに投げかけをして、お願いをしておくということだけでも、地域の人たちが関わってくる、接点ができる、ということが2つの事例では期せずして同じ表現が出ていたと思うんですね。ですので、やはりそういう仕組みとして、『ゆるキャン△』の場合は外からのきっかけかもしれませんが、それを地域の中でうまく取り込んでいこうというような変換がなされてきているということもすごく大事なことかなと思いました。

そして私も興味深かったのは、昨日若い人たちとの接点をどう作っていくのかっていう話がありました。そういう意味でも、「五条ヶ丘活性化協議会」のお話も、『ゆるキャン△』で人が来始めそうだからという声を聞きながら、おそらく地域の中にも何かしたほうがいいんじゃないかなと思っている、比較的中堅、若手の方っていらっしゃると思うんです。けれども、普段はお互いが何を考えているかあんまり分からないので、集まるきっかけとか寄っていくきっかけがおそらくないと思うんですよ。そういう意味では、『ゆるキャン△』からそういう地域の同士が出会う場が導き出されて、今日も4人の方にお越しいただいていますけれども、もっと地元にもそういう意識のある方がいらっしゃると思うんです。

「NPO 法人あったかいよう」もそういう意味ではプラットフォームができて、ちょっと何かやれたら、自分が動いて町が良くなったらいいいよね、みたいな場を、受け皿を作っておいて、この指とまれで入って来られるような受け皿を作っているとかですね。そういうところも昨日の中でもかなり議論になったところとつながるなと思いました。

そしてデジタルの使い方に関しても、「くにさき地域応援協議会寄ろう会」のお話の中でやはり出てきたのは、単に手段というよりも、やはりいろんな地域の課題があるところをもう一度整え直すようなことをちゃんと意識しながら、それを大きい枠組みで、集落とか地区の小さいところを、もっと横をつなぎながら、全体としての見える化をはかっていく。そのツールとしてデジタルって非常に大事だし、スマホ教室の進め方も、やはりそんなに難しい話じゃないということも先ほどの実際ウェブを見せていただきながらご発表いただいたところもあったかなというふうに思います。

そして「NPO 法人阿波勝浦井戸端塾」の取り組みもそうですし、「五条ヶ丘推進協議会」の話もそうですが、自治体職員の皆さんの動き方というところも共通したかなと思います。メンバーの方にも自治体職員の方いらっしゃる中で、地元住民の一員として動き出すような、そういう方もいらっしゃるということで。何も公務で地域づくりをやらなくとも、昨日の馬袋さんのように両面持ちながらちゃんと地元に向き合うような方もいらっしゃるし。そういう目線で見ると、やはり役場職員の皆さんは行政マンだというふうに変にレッテルを付けるというよりも、やっぱり地域の中で動ける大事な人材として、むしろちゃんと目線を合わせていくような、そういう場も非常に大事だろうなというふうにも思いました。

どの取り組みも、やはりそういう視点でいくと、昨日今日のつながりの中で読み解けるところたくさんあるかと思っていますし、また地域の

取り組み、皆さん方の地元の取り組みの中にお
そらく学べるところもたくさんあるかと思
いますので、今日のこの機会をそういうところに

生かしていただければというふうに強く思いま
す。以上、私からの総評にしたいと思います。

